

抑留所感

大阪府 寺 田 新次郎

平成三（一九九一）年四月に來日したゴルバチョフ大統領は、抑留者問題について「哀悼の意」という表現をしたが、今度來たエリツィンは、本文とは別に「謝罪」とか「非人道的な扱い」という言葉を使った。

抑留問題に関する経緯はしばしば述べたとおりであるのでここでは省略するが、私が涉獵するところでは、ソ連の我々抑留者に対するもくろみは次のように進んだと考える。

旧満州、北鮮、千島列島から入ソに際して、千人ずつの作業大隊を編成するに当たって、旧軍隊時代の編成をバラバラに解体した。この目的は、旧軍隊の組織のままだと団結が強くて、方が一暴動や蜂起をされる懸念もなしとほしくない。また、上官の命令で兵隊がどちらに動くか不安である。

しかし、抑留した後の作業を指揮させるには将校の力が必要である。このようにして、入ソ後約一年間ほどは、直屬だった上官でなくても将校であるから、兵隊は今まで知らなかった将校でもその言われることを聞き作業に従事した。

共産主義社会の本則に沿って、ノルマによる食料の差という餌で飢餓にあえぐ兵隊を釣った。食料で釣られると人間は弱い。我が身の瘦せさらばえるのも顧みず次第によく働き出した。そして作業成績を上げようと努力する。こうなってくると、もう将校の力は必要なくなる。天皇制軍隊の組織を解体せしめ、労働者、貧農出身者の兵隊に赤軍は徐々に民主革命思想を啓発してゆかねばならない。この段階（概ね、二十一年頃）になると、旧中等教育以上を習得している将校たちは邪魔になる。ほとんどは兵隊をかばうからである。

全シベリア各收容所から一斉に将校だけを抽出して、将校ばかりの收容所に集めた。ただし、最初からエラブカ、ラーダのように佐・尉官ばかりの收容所も

あった。その後、コムソモリスク、ムーリーにも抽出された将校ばかりの収容所を新設している。ここでも御多分に漏れず激しい民主運動が起きたと聞くが。各収容所では、出て行く将校が相当激しく吊るし上げを兵隊達から食らった話も聞くが、それも旧組織のままだとかつての仕えた上官だからそんな馬鹿げたこともできないが、もうバラバラの編成になってしまっている。下級者もソ連赤軍の威力を借りて自ら赤カブラに変身してやったことと思われる（皮を剥げば中身は白）。吊るし上げという言葉はシベリア造語で、大勢が集まって一人の者を口々に罵ることを言う。大衆の前で自己批判させるという意味で行われたのが民主大会。

最初に各隊をごちゃまぜにされたということは、戦友愛も薄くなり、顔も名前も知らない者同士が一緒になったものだから、病気をしても死亡しても出身県も住所も分からないということが往々にして生じた。これが今日までも尾を引いて調査不可能になる一因ともなった。軍隊時代は、戦友は家庭のことまでみんな話

し合って、知り尽くしている者ばかりの集まりであるが。

ソビエト、ロシアの地下資源は無尽蔵だと思った。東から、アルチョム、スーチャン、ライチハ、ブカチャチャ、カラガンダ、アングレン等の石炭鉱山が無数。また錫、銅、チタンの鉱山。北上するにつれ、千古不斧、人跡未踏の密林が無尽蔵である。

環瑛、孫呉の將兵に関して言えば、ライチハ地区は、ギウダ、アラチカ等の炭鉱もあり、作業は炭坑一本やりだが、ブラゴエ地区は、黒河から来る略奪物資の荷揚げが一応終了すると、雑用のためどこともなく北上、各所に分散させられ不明が多い。それは、北上してチタ州の手前のツウーまでも連れて行かれた記録がある。

総じて言うならば、国境近くに展開していた部隊はど入ソは早かった。黒河から対岸のブラゴエシチェンスタ市に渡り入ソした兵力は、概数二十万人近くあったと考えられる。しかし早期に入ソさせられた環瑛、孫呉の部隊は、叙述のようにブ市近くに滞留させられ

諸作業に従事するが、後続の部隊はほとんど、どこともなく北西進方向に貨車で運ばれていった。最も犠牲が多かったのは悪名高いバム鉄道の建設作業で、次は炭坑、鉱山労働であった。中には、民主運動も日本新聞も何も知らず、旧軍隊の階級章を付けたままナホトカまで来たという集団もあった。

収容所の工夫のさまざま

次に抑留者の苦労話を聞いていただきましょう。

入ッしてから一年半位までは軍隊で着ていた被服のままでしたが、冬になって、若干フハイカという綿入れの作業衣が渡されましたが、すぐ破れて中身の綿がぶら下がってきました。共産主義社会の掟で、「能力において働き、その量において分配を受ける」の原則に従い、隣の友はでっかいパンをかじっているが、こちらは煙草十本入りの箱位のパンを、眼をつむりながら隣りを見ないように食べる。

野菜不足で皆夜盲症になって、夜便所の往復に、相手の足音は聞こえるが避けられず、すぐぶつかってし

まう。北斗七星が手の届くように見える体なら健康である。

厳寒期になると、空気中の水蒸気が凍結しキラキラ光って見える。マローズと言う。こうなると関東軍の防寒被服ではだめ。みな凍傷にかかってしまうので、手足の先を絶えず動かしていなければならぬ。靴下なんかはとつくにないので、ポロ布を足に巻きつけ靴を穿いて行くが、すぐに足の中でしわになってしま

う。

炭坑で動いている機械に使うグリースを盗んで帰り、溶かしてランプの油にする。所内が油煙で顔も真っ黒。この煤を、草原で拾ってきた家畜の骨をグツグツ煮出して膠（にかわ）を作り、その液に混ぜ黒インキを作る。黒光りする実に良質の墨が採れるが、この膠は日持ちがしないのが欠点。

やはり拾ってきた竹を削って先を尖らしペンを拵え、それで、やはり拾ってきた炭坑で使ったダイナマイトの紙袋の皺を所内で暇なときに延ばす。延ばし方は飯盒の掛蓋に火のついた石炭を入れアイロンの代用

にして、裁断してノートに作った物に書き連ね、勉強したものだ。

マッチがないので、作業衣の中身の綿をちぎって棒状に巻き、火打ち石で火を起こすことを考えた（堅い石を探す）。これを腰にぶら下げて歩く姿はさながら原始人。誰かが言うに、ワカメを着た人間が歩いていくと。

次に苦勞したのが、衣服を繕う針と糸です。針は、炭坑の機械（エスカワートルという削岩機）の切れたワイヤーを拾ってきまして、それを切断して先端を煉瓦か石で尖らして細くし、耳は石炭の火で焼いて少し平らにして、何日もかかってワイヤーの先で細い糸を通す穴をあけました。糸は、破れてくる作業衣のほつれから大事に一本一本ほじくり出し、これを二、三本撚り糸にして、弱い物ですが糸巻きにして持ちました。早く祖国へ帰りたいという一念のほかは何も考えることはありませんから、こんなことを虱取りをやりながら十年一日のごとくやるのでした。

尻の筋肉がありませんから、一カ所に長く腰かけて

ることができません。すぐに痛くなります。寝ているときも一緒に、板の上に毛布一枚ですから長く仰向けに寝ることもできません。

一カ月に一回身体検査がありました。ソ連の女医が、幼児の玩具のラッパのような聴診器を我々の胸部に当てまして診察します。次に素っ裸の我々を「回レ右」と後ろ向きにさせ、尻の筋肉を摘み上げて、筋肉の付き具合でカテゴリー（等級位）を一級からO・K（アズダロービイナヤ・カマンダ（栄養失調））までの四階級に決定する。（第六国境守備隊史・五九〇ページに、軍医中尉多田久男氏が体験談として載せておられる）

ビタミン不足を補うため、春になって芽をふく野草は片っ端から採ってきて茹でて食べた。森林地帯では松葉のスープを作ったというが、ライチハヤブラゴエ地区では針葉樹等はなかった。凍った馬糞を馬鈴薯と間違えて拾って帰り、溶かしている間に判ったという、笑えぬ悲喜劇も幾度か経験している。プレヤ収容所では、野原に捨ててあった家畜の頭を毛が付いて

ウジがわいているまま拾って帰り煮て食べたという体験談を聞いたが、このありさまを目撃していたという当時の女事務員が生きていて（当時二十三歳の娘は今六十八歳）、昨年訪口した墓参団一同に、そのとき私はそれを見て身震いしましたと回想話をしたという。

（ナージャーさん話）

ゴミ溜まりで落ちている穀物をあさる。黒河事件を書かれた溜口麻一氏の著作「刻みつけられた足跡」の一五〇ページには、この穀物は一度人間の体内を通過した物の中からも探し出されたと書かれてありますが、ここまで来ますと、もう書くことがあまりにも惨めで、私もワープロが打てません。人は衣・食・住足りて礼節を知るとか何とか言いますが、そんな生易しい段階はとっくに過ぎ去っています。それは、衣や住でなく食が先ず最優先するということです。まさに餓鬼地獄もどん底です。

朝に渡される昼食のパンも、朝いっぺんに食べてしまわないと、手にして作業場で食べようと持って行くものなら休憩中に誰かに盗まれてなくなる。持って

行く物は、腰に吊り下げた昼にスूपをもらうための缶詰の缶だけ。私は何かに書きましたが、腰に下げたこの缶詰の空き缶が、皆無言で歩いて行く作業場の行き帰りに寂しく悲しく音を立てて鳴るのが人生の末路を告げる鐘のように聞こえたと申しました。山田の案山子のような姿でのことです。しゃべる気力も返事する意欲も失せてしまっている者ばかりでした。それは、いつ帰還できるかが全く分からないことと、祖国日本の現状と、第一に肉親家族の消息に対する不安が瞬時も脳裏から離れないことから、皆をそうさせたのだらうと思います。

虱に噛まれた無数の発赤した跡を掻いているときだけはその痒みに紛れて祖国を忘れていてと誰かが言っていて、ニヒルに笑っていた友の顔が浮かんできます。しかしこの虱は徹底して潰さないで、虱が媒介する恐ろしい発疹チフスに罹り、高熱を発し、遂には脳症を起し死が迫ってまいります。が、その繁殖力には恐怖を抱きました。死期が近づいた人からは、体温が下がるためか、虱はゾロゾロと這いだすことも知りまし

た。体熱が三十八度以上か、外気が零下四十度以上でないとい、作業は休ませないと言います。

収容所地獄では、この世のことと思えない万苦はほかにも数々あり、限りがありませんので、少しは気持ちや和らぐ話をしましょう。

白樺の樹を切断し（包丁はビヤ樽の胴に使っている帯状の鋼鉄を剥がして、叩いて刃を付けたもの）、木目のよいところでパイプの作成。穴を開けるのはワイヤー線を焼いて通す。できあがったら、皆で木目の良さを競い合う。同じように、白樺の樹で麻雀パイを作成してゲームに興じる人も出始める。炭坑にはいろんな色の粘土が出るから、白黒の粘土で碁石を焼いてこしらえる。結構碁の有段者もいたようだった。

文化活動ではラジオドラマのようなことも始めたし、ライチハ第十九地区から新星劇団というグループが、今もたまにはテレビに出る青木洗一を歌手として慰問演奏に来た。生きる望みも失い始めているときだった。だがこんな娯楽は、抑留されてから二年ほど経てからであった。

抑留中ソ連での民主運動

抑留問題を語るとき、収容所内における洗脳民主運動を避けては通れない。

赤軍の政治部ではかねて準備があつたのか、入ソさせられた年の九月十五日に、早くも我々に読ませ共産主義教育に資するためか、「日本新聞」創刊号を出しているが、一般の各収容所に配られて初めて目にしたのは翌年（二十一年）夏頃だったと記憶する。入ソ以来ニュースに飢え、活字を読んだこともなくかつ祖国の安否を按ずる皆は、貪り読んだ。そしてすぐに、これは洗脳新聞で一方的な記事しか載せないだろうと、直感した。

記事の内容は、自国（ソ連）の宣伝と諸外国のニュース、それと、びっくりしたのはアメリカの悪口と、日本の時の内閣、片山、芦田内閣の罵倒をさんざんに書き連ねる。そして、祖国日本を救うのはソ同盟と日本共産党のみであると書く。米ソは協力して大戦に勝つたのに、どうしてこうまで米国を悪く宣伝するのだろうかと疑問を感じたが、冷戦の始まりであった

のだ。

同志徳田、志賀、野坂と連日載る。この日本新聞は昭和二十四年十一月の六百六十二号まで発刊され、二十万部印刷されていたそうだ。週三回、編集責任者は極東軍管区政治部に所属したかつてのタス通信の日本特派員だったコワレンコ中佐で、その下に編集委員として、浅原正基（ペンネーム諸戸文夫）、矢浪久雄（ペンネーム相川春喜）、高山秀夫ほか多数が各收容所から抽出されてハバロフスクに集まり、上記コワレンコ中佐や他の赤軍政治部将校の検閲のもと編集に当たった。最初は二ページで、後四ページ建て紙面。

浅原はペンネームをソ連外相のモロトフをもじって諸戸文夫といったが、我々は彼をシベリア天皇と言っていた。チタ地区にもう一人、日本共産党中央委員の袴田里見の実弟の袴田陸奥夫という左翼運動の経験者が捕虜として抑留されていたが、彼は前記諸戸と意見を異にし、協力していない。諸戸は日本の大学生から入隊し中支にいたが、後、ハルピンの露語学校に転属になり、いささか戦争直後になって特務機関の端役を

やらされていたことが暴かれ、抑留四年目になって戦犯としてシベリア天皇の座から滑り落とされた。これにまつわる高山との抗争の醜聞もあるが、省略する。この日本新聞の発行を嚆矢として民主運動が始まる。

最初は部数も少ないから、論説サークルと言って回し読みをしていた。次いで、二十一年秋頃に日本新聞「友の会」という組織ができた。研究しようという者の集まりである。

そうするうち、これら先駆者？達の先導で、作業成績を向上しようじゃないかと言いつつ。その根底には、民主運動者と作業優秀者から先にダモイ（復員）させるらしいと、羨望的な宣伝をする（実際はそうではなかったが）。

次いで、赤軍政治部の煽動によって将校の吊るし上げが始まる。反軍闘争と銘うって。そして、今まで利用していた将校をどこともなく連れ出してしまった（軍隊組織の解体）。

次に現れたのが「反ファシスト委員会」なる組織で

あった。これが所内の民主運動の推進役を務めた。依然として吊るし上げ、相互批判、自己批判が活発に行われる毎日が続いた。

最後にできたのが民主委員会という組織で、これはもう所内の絶対的権力を握った。所内の天皇で、作業場、人事、役割から帰国者の順位の人選まで決定する権限を持った。

朝日新聞社からさきに刊行された『復刻、日本新聞』の付録や、浅原正基著の『苦悩のなかをゆく』を読むと、シベリア抑留者の民主運動は、極めて自然発生的に、下部の労農兵士が誰に言われることもなく自分達から盛り上がる力によってやり始めたことであつた、内部のエネルギ―が次第に盛り上がって起きたもので、誰の強制でもなかったと書かれてあるが、私は、否、全員がそう考へてはいなかったと確信するが、どうだろうか？

私はさきに当時の民主委員長は所内の天皇的存在だと言つたが、これに睨まれたらダメイ（帰国）はおろか、作業場の差別、さらには営倉、懲治囚人収容所へ

の転送などまで、赤軍に密告されてひどい仕打ちに遭う。シベリアの各収容所にはみなこの民主委員長が君臨していたはずだが、これら往時権力を振るつた者たちで、復員後日本共産党に入党し活躍している者がいるということを私は寡聞にして聞いたことがない。日共の「赤旗」を配達しながら地区委員として働いている程度は聞くが、あれほど大言壮語したのだから、少しは日本共産党の中央委員ぐらいになつていてもおかしくはないのと思う。

シベリアから復員するとき、ソビエト連邦国家保安委員会（KGB、ゲーベール）の秘密指令を受けてスパイになることを承知して早期に帰国した者が四百人、五百人もいたと言われ、それらの中にはかつて関東軍の参謀だった者もいる。そして、ラストボロフのアメリカ亡命事件当時も話題に上つた。第六国境守備隊史の中の六六六頁に、このようにスパイになったら早く帰国させると執拗に脅迫された人の体験談が生々しく書かれている。ダメイを餌に弄したソ連の陰惨な手口でなくて何であらう。

さんざんと抑留中のシベリア民主運動を回顧しましたが、かく言う私も抑留三年間、この運動に関心が全然なしではいられませんでしたが、先頭で旗を振ることもなければ、と言って、反動と見られるような動きはしなかった。私の処世術ともいうことです。こんな姿勢に対し、同志寺田は日和見的だと吊るし上げの一步手前までできていたことは分かてましたが、そのあたりを適当に泳いでいたことを今告白します。所詮はえせ非民主主義者だったということ。だが大方が、こんな者が多かったのではないですか？

【執筆者の紹介】

筆者は「シベリアを語る会」の副会長であり、環璣会会長を務められ、その温厚の内に秘められた熱意と信念には魅せられるものがある。

また、財団法人全国抑留者協会大阪支部より本部評議員を委嘱されている。

(大阪府 杉山 森一郎)

雪のシベリア抑留記

大阪府 谷 詰 潔

この記録は「集団的毒殺の屍」と題して、私が身をもって体験したことを事実に基づき、半世紀前の記憶を懸命にたどり、本当は思い出したいくないが、私たち同年輩の皆さんが極寒の地でいわれなき苦役に連行され、一切れの黒パンと顔の映るスープでノルマ、ノルマに追い立てられ、寒さと栄養失調で倒れし友よ安らかに眠れと祈るのみ。

思えば無謀な負け戦に昭和二十(一九四五)年三月の春まだ浅き旧陸軍記念日に、赤紙一枚で善通寺の連隊へ仮入隊。すぐさま牡丹江の先のムウリン重砲兵五四七部隊臼砲隊へ連れていかれ、毎日爆弾を腹に巻き、敵の戦車に潜り込む練習ばかり。一カ月ばかりすると、本隊は本土防衛とばかり濟州島へ移動した。我々は足手まといとなり残されて、朝鮮とソ連と旧満